

論壇

多様性損失 感染症に影響

大雨や竜巻など、これまでに経験したことのないような大規模自然災害が起きている。気温の上昇も顕著で、今年も暑い夏が来そう。雪国では冬でも降雪が非常に少ない年が多いと聞く。人間が、地中の奥に埋まっている石炭や石油を掘り出してそれを燃やし続けることで大気中に多くの二酸化炭素が蓄積し、それが太陽光の熱をため込む温室のような役割を演じている。こうしたことは知識としては大半の人が知っていることだが、現実には深刻な自然災害が起ると、こうした問題をより真剣に

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

考えるようになる。

環境省が毎年発表する環境白書には地球環境に関する現状やさまざまな取り組みが整理されている。令和3年版の環境白書を読んで、次のような記述を見つけた。「1960年以降に報告される新興感染症の30%以上は、森林

地球環境の改善と国民の行動

減少、都市化等の土地利用の変化が発生原因となっている」と生物

多様性および生態系サービスに関する政府間科学―政策プラットフォームが公表している。生物多様性の損失が急速に進んでいることによるさまざまな問題指摘する人は多かったが、それが感染症にも影響を及ぼしているという。新型コロナウイルスが生物多様性に関係があるかどうかは分からないが、環境劣化が進めば今後深刻な感染症が増えるリスクは大きいということだ。地球上での人間の活動があまりにも拡大して、生態系のバランスが大きく崩れているの

「地域の循環と共生」劣化

地球環境を改善する施策は国任せではないということだ。国の役割も大きい。国民一人一人の生活から変えていくことが重要だ。ローカルの生活者の目線での環境問題への取り組みだ。地域脱炭素ロードマップの検討が始まっている。「暮らし」や「社会」分野を中心に、国民・生活者目線で2050年脱炭素社会の実現に向けたロードマップを描こうというのだ。

「地域の循環と共生」劣化
そうした中で地域循環共生圏(ローカルSDGs)の確立が必要となる。環境問題を経済・社会に内包して統合的に対応することが求められる。20世紀の拡大成長の中で、全国の多くの「ローカル」は、東京を中心とした都市化の中に組み込まれていった。地域の循環と共生は劣化してしまっただ。21世紀もこのままの姿勢で進み続けられれば、地球環境が壊滅的な状況になることは明らかだ。今、世界的な規模で地球環境の問題に関心が集まっている。こうした時期だからこそ、地球規模の問題をローカルでどのように対応するのか、そのために地域で循環と共生のサイクルを取り戻すための行動を始めなくてはならない。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。